
ある少女の質素にして偉大なる時祷書

冬沢 紬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある少女の質素にして偉大なる時祷書

【Nコード】

N0165U

【作者名】

冬沢 紬

【あらすじ】

少年は1冊の本と出会う。それは血とカビの臭いに塗れた、中世より連綿と続く殺戮劇との出会いを意味していた――。少女の願いを少年は聞き入れ、本を手に取る。宴は、始まった。筆者初のがチバトル系ファンタジーです。上手くいくかわかりません。この作品は初っ端から主人公がTSします。がっつかしこ。ヒツジョーにグロい作品になりそうです。そういうのやべえって方は、気をつけて読んでください。

L e p r e m i e r l i v r e (前書き)

初ファンタジーです。

しかも、時祷書とか言うなんだかマイナー（その道の人にはそうじゃないだろうけど）なテーマでバトルです。

設定とか背景とか調べるだけでいっぱいだよ、もう！

Le premier livre

時祷書、というものがある。

それは祈りの指針。

人々の生活の中に根付く信仰。

時祷書が誕生したのはもともと、中世ヨーロッパである。

当時は黒死病などの大きな混乱があり、人々は修道士という道に救いを求めていたのだ。

しかし、誰もが社会生活を全て切り捨ててまで修道士として生きられた訳ではなかった。そこで、人々は妥協点を見出した。

それこそが、時祷書。

当時の修道士の生活を、簡略化した上で真似る、そのためのいわば“マニュアル”だったのだ。

そしてそれらは今に至り、違う位置づけとなっている。文化的な価値や美術品の価値がつき、どこかの美術館に收藏されたり好事家たちの蒐集の的となっている。

信仰は歪んでしまった。

私たちは、只、道具だった。

人々を導く手助けをし、人々の幸せを願った。

いつしか、それは変わってしまった。

人は、幸せになった。

豊かな生活、豊かな食事、豊かな衣服……。

私たちの役目は変わらなかった。

ならばきつと、変わってしまったのは人間たちなのだろう。

人間が私たちを見ると、濁った目をするようになった。役目を終えて眠りについた兄弟や姉妹たちが再び起こされたとき、そこにいたのは信者ではなかった。商人だった。

人間の濁った欲に中てられ、私たちは変わってしまった。

人々を引きずり落とし、人々の墮落を祈った。

歪んでしまった、可哀想な兄弟姉妹たち。私はそれを、救わなければならぬ。それが、あの人間とのたった1つの約束なのだから

――

夜天にきらめく銀の三日月。

それは妖しく揺れて、その身に金色（こんじき）の満月を映し出す。

その白銀の三日月の持ち主は、凍えるような声で囁いた。その腕（かいな）に抱いた一冊の書に向かって。

「『Le grande faucille de juille
t』」

「Oui, mon ma?tre」

少女が答えた。いや、少女はいない。いるのは三日月——牙のよ
うな大鎌を振りかぶった、黒尽くめの男だけ。唯、少女の声だけが
聞こえた。

高台の上の墓場を疾駆する少女。

やや古風の、簡素な服を着た小柄な少女は必死にその足を動かし
ていた。四肢はすでに鉛でも流し込まれたかの如く逃走の妨げをす
る。

「そうだ。彼女は逃げていた。」

相手は見えない。彼我の距離はいくら？ わからないことばかり。
いや、1つある。それは——

明かりが消えた。街灯が、1つ残らず消えた。

ガランガランッ という耳障りな音と共に、地面に転がったナニ
カ。それが進路をふさぎ、少女はたたらを踏んだ。

「っ！」

その眼前に、音も無く黒衣の男が降り立つ。

少女は諦めてはいなかった。絶望はしていたが、決して次の手を
放り出すような愚行はしていなかった。

男がチャキ……と大鎌を振りかぶった。それは月の逆光に晒され
てシルエツトのみが浮かび上がったそれは、まるで“Dieu^死 d

e mort”のよう。

それに相対して、少女も構える。そしてその口からは流れるような詩が響く。

「Les ciseaux de juin」

少女の腕が、開いた。まるで、本のように。

驚くべきことに、少女の腕がひとりでにめくられ、その内の1ページが浮き上がった。それは少女に刃渡り50センチほどの、1挺の鋏を与え、光の粒子となって少女の体に舞い戻った。

最早鋏とは呼べないようなそれを持ち、少女は鎌に向き合う。

無駄な気合や掛け声など要らない。ただ静かに相手の呼吸を読み、己の呼吸を悟らせない。

少女が動いた。まるでコマ落ちしたかのような速度で、男の右足を狙う。到底人の目では追うことなどできない速度で迫る巨大な鋏の顎は、しかし男の足に届くことは無かった。裁断される寸前、大鎌の柄で刃を止めたのだ。

男は躊躇うことなくそのまま鎌を振り下ろす。だが、少女も黙って斬られるわけではない。ほぼ四つんばいのような低姿勢から、四肢をつかつて後方へ距離を取った。

再びにらみ合う2人を。夜風が冷たく撫で上げる。再び、いや、今度は両者同時にぶつかった。少女は巨大鋏を両手で構え、相手を貫かんと。男は大鎌を振りかぶり、一刀両断せんと。

月の下、2人は止まっていた。たった2合。たったの2度打ち合っただけのはずだが、2人とも大きく体力と精神力を消耗していた。それも当然だろう。リアルタイムで膨大な情報を収集、判別、処理、そして実行しなければならぬのだ。読み違えれば一瞬で死ぬ。そ

して、その結果。

少女の鋏は、男の脇腹を掠めていた。

男の鎌は、少女の胸を貫いていた。

ずちゅり、という湿った音と共に鎌がゆっくりと少女の体内^{なか}から引き抜かれる。鎌は少女のモノであつた液体が絡みつき、きらりと月の欠片をいくつも映した。それを見ながら、男が呟いた。

「……『S a n g g . C e s t V i n n 』」

少女は喪失感に見舞われながら。後ずさる。手すりに足を引っ掛け転ぶが、懸命に墓地の端、高台の縁まで這って行った。

「アッ！！！！！！！！！！」

しかし、無慈悲な三日月は振り下ろされた。それは、少女の足を地面に固く繋ぎ止める。

外そうとして外れるものではない。

少女は俯いた。

男はまた呟く。

「C e s t 『D ? n e r r 』」

そうして少女の唇に己のそれを重ね合わせようとして――

少女が、嗤った。

パァン、という破裂音と共に少女はいくつもの金色に輝くページ

となった。それらは一旦爆発するように広がると、男の頭上で集まり、風に乗って眼下に広がる町へと散って行った。

男はそれを何をするでもなく見やると、その場から音も無く立ち去った。

L e s e c o n d l i v r e

初夏の日差しに目を細めながら、俺は額に手を当てて庇ひたかを作った。

俺は歩きなれた、どこにでもあるような住宅街をのんびりと最寄り駅に向かっている。日差しがうつとおしいが、それも天気がいいということだろう。ああ、今日は絶好の飛蚊症日和だ。死ねばいい。

俺は軽く眼球を動かし、視界のゴミをどこかにやる。治療はなんだが怖いのでやる気が起きず、十数年このままだ。

これだけ日が照っていると、飛蚊症以外にも紫外線で網膜もうまくが痛い。実際のところはどちらかというと、痛いというよりも目も開けたくないくらい眩しい、という感覚だ。大学の図書館に資料を借りに行こうとしていたのだが、失敗だったか。

そんなことをつらつらと考えながら、2年目ともなるキャンパス行きの列車に間に合わせるべく俺は足を少し速めた。

駅に着くと丁度誰もいない。朝とは言えず、昼にもまだ早い、そんな中途半端な時間だからだろうか。案の定、列車内にも殆ど人影が無かった。

俺は特に理由も無く溜息を付いて、空いている席に適当に腰をかけようとして――

「よっ！ かーえーでっ！」

右肩に衝撃を受けてつんのめっていた。

俺はすばやく振り返って、声の主に怒りを叩き付けた。

「電車の中で——暴れるなっ！」

気合を入れた拳を、そいつの脳天にグリグリと押し付ける。俺に
タックルしてきた声の主は桜木 高志^{さくらぎ たかし}。同じ大学2年の、高校時代
からの友人だ。

俺は高志の頭をグリグリし続けながら、続けた。

「下の名前で呼ぶなって、何度も言ってるだろ！ 好きじゃねえんだよ、そう呼ばれるの！」

……そう。俺は自分の名前があまり好きではない。笹落^{ささふき} 楓^{かえで}。まあ、笹落はいい。苗字だし、仕方ない。でも、楓って何だ、楓って小さい頃は『女みたい』といじめられ、大きくなってからは『名前の似合うような女だった』といじられ……。とにかく、ネタにしかないこの名前をどうにかしてほしい。

そしてこの世に生きる『楓さん』たち。上手くいってなかったら、同情する。上手くいっていたら爆発しろ。

俗にハゲのツボと言われる脳天を押しながら、小声でハゲろーハゲろーと唱えてみる。すると高志は面白いように反応した。

「やめろよ！ は、ハゲって、うああ……、うちの家系、親戚一同ハゲなんだよ……！ リアルすぎるわ！」

その声をスルーして空いている席に座る。ほっとくとめんどくさいので、適当に相手をしてやった。

「あー、気にすんな。そこ実は頭痛が治るツボだ。百会っていうんだ。知らなかったのか？」

「マジか！？ ありがとう……って、痛えもんは痛えよ」

何も知らないやつはこれだから困る……と、おれは首を振った。

「痛いって事は悪いって事だ。ほら、常々お前って頭悪いって思ってたし」

そのまま俺はグリグリ続ける。

「ふざけんな！ もう充分だろ……」

高志が可哀想になったのと飽きたので止めることにする。

そうして中身の無い会話を続けるうちに目的地に着いた。

俺は高志と共に大講堂に向かう。語学は去年のうちに取ってしまったので、今年はレポートメインの出席すらまともに取らない講義ばかりだ。だから――

キンコンカンコン――……

始業チャイムが鳴ってもゆっくりと歩いていった。

まあ、いいか。図書館は授業後で。

本日の授業はキリスト教における図像学だ。なんでも、「^{マイ}Master of the Domini」——荘厳のキリストだそうだ。ここら辺は聞いたことがある人も多いと思う。

キリスト教美術の主題であり、出展は（注1）『イザヤ書』や『エゼキエル書』、『ヨハネ黙示録』などと幅広い。そいつらから派生した教父文学、典礼文、聖歌などに基づき、キリストの終末的な出現を表現する図像だそうだ。

面白いんだけど、正直脳味噌をフル回転させて聞いていなければならぬので、その、なんだ。疲れる。

シャルトルがどうだとか四聖獣がどうだとか、話は多岐にわたって展開して行く。そしてそろそろ本格的に俺の頭がパーンッってなりそうになったところで——授業の終わりを告げる鐘が鳴った。

俺の隣では、高志がぐっすりと睡眠中だった。学生という身分をフル活用ですか。そうですか。

「起きろ。俺はこれから図書館に行くけど、どうする？ お前」

顔にプリントのインクを反転写しながらのっそりといった動作で

高志が起き上がる。これじゃまるで、あれだ。『印刷者』じゃないか。革命の詩が書かれていたりなんかしたら、……ゲフンゲフン。

ともかく、高志の返事を待った。

「ああ……そつか。あー、俺も付いてく。いや待て、コンビニ行く」

俺は1つ頷くと、「じゃ、1時間後に喫煙所で待ち合わせな」とだけ残して図書館に向かった。

俺は早々に目当ての資料を借りてしまったので、することも無く40分ぼうつとタバコを吸って待っていた。

10mgのタールと0.8mgのニコチンが俺を満たして行く。紫煙はゆらゆらと風に身を任せて、幾重にも幾層にも姿形を変えていく。

タバコを吸ったとき特有の毛細血管の死滅する感覚——俗に言う、ヤニクラを味わいつつ、煙に身を浸す。

ああ、タバコがないと俺は生きていけねえなあ……。タバコを何も考えずに吸っているときだけが、一番心安らぐ。モウダメダ。ハヤクナントカシナイト。

……改める気なんて、毛頭無いけれども。

「よ、わつりい！ 遅くなった！」

俺は顔も見ずに軽口を返した。

「悪い。超悪い。あーもー、……根性焼き」

そう言っ、至極ゆっくりとタバコを高志に向かって突き出した。

「うおわつと！ だから悪かったって」

「次の授業……5限はどうする？」

高志はちよつと考えた後、「あー、法学かー」と言っ、頭を抱えた。

「パス。俺はパスだ！」

タバコの火を灰皿に押し付けつつ、悩む高志に言っ、やった。

「よろこべ。今確認したら休講だよ」

そう言っ、途端に高志は俺の隣に脱力して腰掛けた。

「ちょ、マジかよ！ 真面目に今日来た意味は何！？」

俺は今座ったばかりの高志などお構いなしに立ち上がる。

「知るか。ってか、今自主休講とか言っ、たじゃねーか、アホ」

「それはそれ！　これはこれ！」

威張られてもなあ……。

俺はもう用事はないわけだけれども、どうしようか。

俺の思考を邪魔するように、高志が駄々をこねた。

「カラオケ行こうぜ、カラオケー」

「あー、どうすつか」

俺もカラオケは好きだ。できるなら行きたいけど……。

「ごめん、家の蔵の資料整理しなきゃならないんだ。いいもの出たら貰っていいって言われてるし」

「貰っ……だと!？」

そこに飛びつくのか。まあ……これで労働力確保と思えば……。

「あー悪いな、これ、帰る頃にな夜だぞ」

陽の落ちてきた空を見ながら、蔵の扉を開いた。かび臭いにおいと共に、まるで質量や意思を持ったかのような風が俺たちに向かって吹いてきた。

丁度自宅には誰もいなかったので、勝手に蔵を開けた次第だ。

「さて、やるか」

俺の隣で高志が絶叫する。

「どんだけだよ！？ 終わんねーだろ、これ！」

夕闇も相まって置くまでも見通せないほどの暗闇。まるでそれは魔窟のよう。

「とにかく、やるぞ。とりあえず要らなそうな物は蔵の外。判断が必要そうなものはこっち。触ったらヤバそうな物はそのままってことで」

「ヤバそうな物！？ 一体何があんだよ」

俺は例えば……と指差した。

「何十年前のものだかわからない、カビの生えて異常に髪の毛の伸びたフランス人形とか？」

それを見てしまった高志は早くも心が折れたようだった。

「あー、だめ。無理。ぜってえおかしいだろ！？ 早く供養寺に…」

…！」

早速作業に取り掛かりながら俺は高志に言い放った。

「いいから早くやれ。終わるものも終わらんぞ」

「畜生！」

そうして俺たちは特大のジェンガの群れに挑みかかった。

深夜1時。ようやく目処が付いた俺たちは、今日の作業はここま
でとして高志を家に泊めていくことにした。

「さつて、よさそーなの……お宝っ！？」

さきほどから高志は宝探しに夢中なのだが、俺はある一箇所から
動かなかった。否、動けなかった。始めは軽い気持ちで、「これは
レポートの素材に使えるかも？」と背表紙の題を読んでいたのだ。
そう、1冊の本である。何故かその本だけは他のものに比べて埃が
少なかった。だからかもしれない。目立たないが、おそらくこれは
中世装飾本だろう。……まあ本物なんかが家にあるはずが無いので、
どうせ写本の写本あたりじゃないだろうか。いや、それでも充分価

値がありそうなものだけねど。

タイトルは……なんだろう、これ。フランス語か？ H E U R E
S……。確か、時間だっけ？ フランス語なんてマトモに授業聞いてなかったからよくわからない。『Un l i v r e d e l e
s h e u r e s i m p r i m ? — T h i e l m a n K
e r v e r』……読めるかボケ。

俺は諦めて、その本を引っ張り出した。大学の教授にでも聞けば、
滝の様な講釈でももらえると樂觀視してだ。

高志はまだ何か漁っているようだったが、無理やり引っ張り出す
と家に向かって歩き出した。

引きずっていると、家の門の方を見ていた高志が声を上げた。

「なー。あの人ずっとこっち見てるけど、何か用事でもあるのかな
？」

それにつられて俺も振り返る。手元でフギヤツとか声が聞こえた
が、気にしない。

……そいつは見るからに怪しかった。初夏とはいえ日差しの強い
日々が続く今日この頃、オールブラックでロングコートなんかを羽
織っているバカはいないだろう。じゃあ、アレは何だ。バカか？

そいつまでは約50メートル。大声でも出さなければ聞こえない
距離だった。

しかし、しっかりと聞こえた。あいつの、静かな声が。

「ソの本、寄越せ」

日本人らしからぬたどたどしい発音。

次の瞬間俺の背中にツララが差し込まれた。それに反して、体からは汗が吹き出す。すぐに我に返って辺りを見回すが、何も変わったことは無い。

まさか、あいつが何かした？

「殺気に、動じないか」

俺がまずい、と認識した瞬間には、既に体は宙にあった。そのまますごい勢いで蔵の中に逆戻りする。

「ガッ……あ……。うっうっうっ」

痛みは遅れてやってきた。高志は視界の隅で完全にノビていた。体が上下するのを見て、生きていると安堵する。見た限り酷い外傷は無い。

それよりも、俺だ。一体何が？ あいつが本って言っていたのは、このHeuresなんちゃらか……？

足音が聞こえる。ジャリッジャリッと確実に距離をつめてきている。

俺は悲鳴の（注2）狂葬曲を奏でる体に鞭打って、急いで立ち上がった。しかし悪いこととは重なるもの。足元で牙を剥いていた古

びた草刈鎌を踏み抜いてしまった。

「ぐあああああああ!？」

どうしようもないミス。そしてその本を地面に広がる血溜りの中に落としてしまった。

びちゃり、という生々しい音と共にページが朱に染まっていく。

俺は急いで本を拾い上げ、立ち上がった。足は痛むが、この際は無視するしかない。

早くこの本を渡して、高志を助けないと……!

——ならん。ならんぞ、それだけはッ!

突然、幼い少女のもののような声が聞こえた。

辺りを見回しながら俺は怒鳴った。

「誰だ! いや、そんなのどうでもいい! 早くしないと、高志がつ!」

声は再び応えた。

——そうか……。ならば、奴を退けるがよい。力なら妾が授けよう! だから、奴にだけは渡さんでくれ! それに……渡せども汝共々殺される運命ぞ……。

「だったら! だったら早くしろ! てめえの都合で高志を殺させ

るわけにはいかねんだよ！」

光が、あふれた。光は俺の腕の内から。その、本からだった。

俺が思わず腕を伸ばすと、その手のひらの上の本は光と風を撒き散らしながら、バラバララララッとページをファウンディングし始めた。そして、その飛び散ったページは蔵を遍く照らす光となる。

その光は俺の2、3歩先に立体的に折り重なって人の形を作っていく。

数秒と経たずに姿を現した声の主は――

外国人の少女、だった。

L e s e c o n d l i v r e (後書き)

(注1) 正確には、旧約聖書『イザヤ書』第6章 1節：『エゼキエル書』第1章 4節～28節：新約聖書『ヨハネ黙示録』第4章 2節～9節

(注2) 誤字ではありません。

いかがでしたでしょうか？ まだまだお話はプロローグ。もっと日常を書いてから？とか考えていたのですが、それもなんだかスローペース過ぎる気がして……。

そんなわけで、次回はバトルです。がんばります！ 近接格闘とかよくわかんねーけど！

Le troisième livre

数秒と経たずに姿を現した声の主は――

外国人の少女、だった。

12才くらいだろうか。今じゃ考えられないような、中世宮廷風のファッションセンスをしている。月光に照らされて輝くのは、深みのある金髪コンジキの髪だ。脱色なんかじゃ絶対に出せない、幾重にもその様さまを変える金色。そして何か決意を秘めたような碧い瞳は、どこか寂しそうに揺れている。

俺は呼吸ができなかった。触れてはいけないものを見ているかのようように、呆然と立ち尽くしていた。

俺が我に返るより早く、少女が俺を急かした。

「妾なれにはもう顕現できるだけの力が残されておらん……。故に、だ。汝なれを依代として戦うしかない。少しの間、体を貸してくれんか？」

俺は戸惑った。当然だ。いきなり本が光って女の子が出てきて、戦うだの依代だの……。

女の子は続けた。

「すまぬ……。後悔せん、とは言わぬ。いや、むしろ後悔すること

の方が多かるう。しかし、だ。妾にはもう時間が無いのだ……。どうか、力を貸してくれんか……？」

力を貸すって言ったって、知覚もさせずに相手を吹き飛ばすような敵に何をどうすればいいっていうんだ。無理にもほどがある。けれど……。

「でも……。言うからには絶対奴を斃せるんだよね……。？ だったらしてやる、契約でも何でも！」

俺の言葉に、少女は嗤った。まるで、自嘲のような笑み。

「契約、とな……。なるほど、言いえて妙よな。うむ、契約を！」

だが、そこで当然の疑問。……というより、今この娘不穩なこと言いやがったような気がしたが。

「と、とにかく、契約って何やりやいいんだ！？」

「簡単なことよ、礼拝の文句を全てそらで言えればいいだけだからな」

俺は絶句した。そんなもの、覚えている訳が無い。現代日本において一般人が覚えることじゃない。

「む……。無理だ。今の世の中、どれだけの奴が覚えているのか……」

すると少女は「止むをえん」と呟き、俺に近づいた。

「ならば、……。その……。接吻！ 接吻すればよい。汝は幸運である

ぞ。力ある時禱書、その中でもヒトの姿を取れるものはひとかけらであるからな。ゆえにこの方法を取れる者も限られてくる、というわけなのだ」

顔を真つ赤にしてやたらと早口でそう告げた途端だった。

「動くナよ……」

その声が聞こえたのは。

俺は何も考えずに咄嗟に少女を庇い、奴に背を向けた。その瞬間、世界が溶けた。否、溶けたのではなく俺が回転しながら蔵の奥に吹き飛ばされたのだと気づいたのは、地面にはいつくばってガラクタの崩落を浴びてからだった。

口を開いても空気の抜けるような喘鳴しか出てこない。そういえば、高志は無事かと目だけで必死に探す。

すると、あった。高志の手だけが、倒れた大型の棚の下から覗いていた。

「うゝ ああああああ！ た、高志……。この、やろっ……」

俺は吼えた。恐らく内臓がいくつもやられているだろう。すでに右手の感覚もなく、左手にいたってはあらぬ角度に曲がっている。この分では両足も碌な事にはなっていない。こんな状況だから痛覚が吹っ飛んでいるだけだ。

俺はもう一度吼えた。この怒りよ、奴を焼き尽くす炎になれと。あいつを肉片に変えて、残らずその血を啜ってやると。アレの五体

を引き千切り、その命刈り取ってくれんと。

「届いたぞ。確かに汝の願い、汝の想いは届いたぞ。……契約を。妾と共に刃となりて、遍く敵の仇敵とならん覚悟を。さすれば、汝の願いは叶えられん」

俺は瓦礫の下、体を寄せてくる少女を抱き寄せた。

柔らかく、温かな体にこの娘の鼓動を感じた。生きている。本が何だ。この娘も、俺も生きている。それを……名も知らぬどこかの誰かに邪魔させたりはしない！

俺が少女の顔をじっと見つめると、その娘も俺のことを見つめ返した。そして俺は、己の唇を少女のそれに重ね合わせた……。

少女が口を開く。

「妾は、『印刷時禱書 “ティエールマン・ケルベール”』だ。汝の名は？」

「笹路 楓……」

少女は俺に抱きついたまま、その腕の力を強くした。まるで彼女と俺の存在を確かなものとするかのように。

「よい、ならばササブキカエデよ。妾と共に詠うがよい。『いざ、我が理よ 告げ知らせよ』っ！」

何のためらいもなく、何の戸惑いもなしに、まるで決定論でそれが何億年も前からそれが定まっていたかのように、俺の唇は自然に

動いた。

「『いざ、我が理よ 告げ知らせよ』……」

少女は高らかに詠った。

「『罪深き乙女の、祝ぎ詩を』！」

俺は、その後をゆつくりと追う。

「『罪深き乙女の、祝ぎ詩を』」

ばらばら、と少女が解けた。顔から、腕から胸から、足から、その体が本のページとなつて解けていく。その向かう先は――

「俺に……入ってくる……！？」

同じく顔から、手から、胸から……俺の体にページが織り込まれて行く。

わかる。体の組成が変わって行くのが。俺はきつと、今人間じゃないんだろう。輝きが消えて、俺は感じた。体のコンディションはオールグリーン。怪我也何も、悪いところは全て治っている。

俺は手元に転がっていた草刈鎌を取ると、瓦礫を押しつけて立ち上がった。本棚や食器棚が折り重なっていたが、まるで紙切れをどけるかのように振り払った。そして、そのことが当然だとも俺は感じていた。

当然だ。湧き上がってくる、あふれんばかりの衝動。とても人間

一人が御しきれるものじゃない。いや、もう人間じゃないんだっただけな……。なら、できるはず。俺は、奴を……殺す。

血は、血で、贖え。

俺は両腕をだらりと下げた自然体から、一気にトップスピードに乗った。そして黒コートを鎌で切り裂くが、目測がずれてしまった。速すぎたのだ。

俺は背中に奴の気配を感じながら、無造作に鎌を後ろに突き出した。ギーンと低く鈍い音がして、草刈鎌に負荷がかかる。成人男性の身長ほどもあるような大鎌が、俺のボロボロの草刈鎌によって止まっていた。俺は振り返り、空いていた手を鎌に添えた。

無音のまま、力の押し合いが続く。

「まさか、オーナーとなってしまうとは……。お前まで殺す気は無かったが、仕方ない」

黒コートの言葉に、俺は何も言い返さなかった。言い返さず、内に留めた。留めて、留めて、怒りを溜めた。

「そこノ彼と同じ、死ンデモラウ」

俺は大鎌を支え続けるのをやめる。フツと、腕の力を抜いた。

顔面に迫ってくる大鎌。俺はそれを、いなした。

昔の話だが、中学生のころまで俺は剣道をやっていた。そのころ身に付いた技術と言うのは、案外忘れないものだ。何千何万と繰り返す

返した剣道の形そのまま、相手の大鎌をいなして、草刈鎌を振るつた。

すべたがスローモーションだった。視界の端に落ちて行く木の葉が見えていたのだから、間違いないだろう。それが枝を離れ、地面に付く前に全てが片付いていた。すなわち、敵の大鎌は地を噛み、俺の草刈鎌は相手の胸元を抉っていた。

俺は昔どこかで習ったままに、その鎌をグリ、と捻った。グチツと音がして相手が膝を付く。自然、俺の鎌も抜けた。

だが、これで許せるだろうか？

「否。お前は、まだだめだ。俺が良いと言つまで、殺す」

最早自分の感情をそのまま口に使っていた。正しい文法など思い浮かばない。俺の理性は、最早千切れかけていた。

その時だった。声がしたのは。

「う……あ……？ 笹、落……無事か……？」

「高志ッ！」

俺の意識が蔵のほうに向いた瞬間、黒コートの男は逃走していた。

「次八、殺す」

そう言い残していったのだが、俺は全く聞いていなかった。それよりも高志だ。急いで棚をどかし、高志の脈を取る。

脈拍は……正常。呼吸も乱れなし、外傷も見たところなし……いや、下敷きになった右手だけ診ておく必要がある。俺は急いで携帯電話で救急コールをした。

高志が運ばれて1時間後。俺は誰もいない自宅の居間でテレビを見ていた。

やっているのは今流行りのお笑いグループによる漫才。世間では大評判の彼らだが、俺の心は全く揺れ動かなかった。

スイッチを切ると、ソファに深く体を沈める。

「で、いつになったらお前は分離するんだ？ えーっと……」

不服そうな少女の声が答えた。

《印刷時祷書“ティエールマン・ケルヴェール”ぞ。覚えておかないでどうする》

ティエールマン・ケルヴェールって……どう考えても女の子の名前じゃないだろ。しかも印刷……時祷書？ って、何だ。

そう思ったので、素直に口に出した。

「なんだか男みたいな名前だな。っていうか、それ、“お前の”名前じゃないだろ？……ティファンヌでどうだ？名前。俺はそう呼ぶぞ。そんなんじゃ無機質すぎる。俺はやだな」

《……初めてだ。そんなことを言ってくれたヒトは》

表情を窺うことはできないが、照れたような声色が彼女……ティファンヌの心を代弁してくれたような気がした。

「それに何だよ。印刷何ちゃらってのは。人の名前じゃねーだろ」

馬鹿にされたと思ったのかもしれない。怒ったような声が返ってきた。

《印刷時祷書ぞ！ううむ、汝は勉強不足が過ぎる……。うむ、ここで1つ、解説してやろう》

いろいろ言いたかったが、勉強不足も確かなこと。黙って聞くことにした。しかし、どうだろう。現代日本で一般常識として時祷書を知っているヤツがいるのだろうか？

とにかく、俺が彼女から聞いた内容はこうだった。

時祷書とは、中世の祈りのマニュアル的存在だったこと。『印刷時祷書“ティエールマン・ケルヴェール”』とは1501年にパリで発行された大量生産版時祷書であるということ。

時祷書は初めこそ祈りの指針として働いていたが、（注1）徐々に美術品として人間の欲望に曝されるようになった。その結果、人々の指針であつたはずが人々を墮落させるための邪書と成り果ててしまったらしい。

ごく一部の時祷書のみが中世当時の純粋な信仰をストックとして戦っている。彼女もその中の1人だった。……“だった”というのは、最早信仰が尽き、車で言うところのガソリンが全く無い状態だったそう。

そんな時だ。俺が、俺と黒コートを“主題”として彼女に捧げてしまった。つまり、俺の血と黒コートを“草刈鎌で倒した”という事実が彼女に邪書としての力を与えてしまったのだ。

また、時祷書には1年の営みが描かれており、それを象徴する戦い・殺しをすれば力が集まるらしい。例えば、10月の『ワイン作り』だったら、『ワインは血の象徴である。よって大量の血を浴びる、もしくは飲めばそれは主題として成り立つ』といった具合である。草刈鎌もそれに準ずるそう。

最早予型論的よけいろん解釈だろう。強引にもほどがある。

そしてその力だが、“怨念”だそう。怨みや苦しみ、憎しみが力となる。そしてそれは時祷書たちにとって麻薬のようなものらしい。

一度体内に入ってしまったら、もう二度と取り除くことが叶わない。

《つまり……妾はもう手遅れ、ということよな……。だが、もう力が尽きていたのも事実。すべて兄弟姉妹を眠らせし後、^{のち}最期は己の手で妾を眠りに導こうぞ……》

寂しいことを言いやる。しかし、俺が口を出せることでもない。「そうか……」とだけ呟いて、寢室に向かった。今日は疲れすぎた。きっと眠れば彼女もどこかに行っているだろう。

多少寂しくはあるが、彼女がそう望むなら仕方ない。

俺は自室に入ると、脇目も振らずにベッドに向かってダイブした。

Le t r o i s i ? m e l i v r e (後書き)

(注1) 実際は、元々美術品やステータスとして製作されたものも多くあった。しかし本作では純粹に信仰の指針とする。

あれ？ まだTSしない……？

おつかしーな、今回でTSする予定だったんだけど……。

次回！ 次回こそ楽しみに！

……なんか、極少数の方のためだけの小説になりつつある。
実はこの小説が一番各部に注意を払って作っていたり。

Le quatrimelivre

「うつ……。んー……」

朝日を感じた。とくにそれ自体にカタチがあるわけではないのだけれど、まるで体の上にそれが乗っかっているような、そんな気分。眠いが、いつまでもこうしているわけにも行かない。今日は高志のお見舞いに行かなければ。

そう思っただけ逆さまの視界の中、時計を見ると――

「12時……だと……!？」

何度見直しても変わらない。俺はガバツと勢いをつけて立ち上がる。しかし、何かにガクンと髪の毛を掴まれ、ベッドの中に逆戻りした。

「痛ってええええええ!」

頭皮が、もげるッ!

痛みに涙目になりながらも、頭をさすろうと手をやるが……長い。髪の毛は後頭部から、下へ下へ……俺の尻の下まで続いていた。

なるほど、髪の毛を踏んづけていたから痛かったのか。いや待て。

長い髪って何だ。

俺は髪の毛を手ですいて目の前に持ってくる。昨日見た、脱色されたような軽い不健康な金髪ではない、純粹な、ベルベットのような光沢の金髪。

まさか、と心の中で大きく叫び、洗面所へと走る。それにしても視界が低い。きつと身長も130くらいだろう。そういえば、さつきから声も妙に高い。まるで、昨日の幼女がすぐそばで話しているような……

洗面所の扉を勢いよく開けて、飛び込んだ。急いで鏡台に駆け寄るが、残念。身長が足りない。

最早予感ではなく確信だったが、それでも確認せずにはいられなかった。腕の力で洗面台の上に上半身を勢いよく持ち上げると、そこに映っていたのは果たして。

「パツキン幼女……」

正確には、昨日の少女ではなかった。黒子の位置も違うし、眉や目の形も、輪郭も微妙に違う。しかし、どこと無くあの娘の面影があった。言っなれば、“俺版”ティファン又といったところだろうか。

しかし……美幼女だ。今すぐにも抱きついてスリスリして、ギューってしたい。……待て待て、俺は紳士だ。そんなことはしない。『YESロリータ、NOタッチ』って言うじゃないか。

思考がまとまらず、余計な性癖まで口走りそうになる。とりあえ

ず深呼吸をして、何とか気持ちを押しとどめた。

そこでふと思い出したのが、ティファヌ。そういえば、昨日以来ずつと姿を見せていないけれど、どうしたんだ？

「おい。おい、ティファヌ、いるのか？」

返事は返ってこなかった。急に俺の中で冷たいものが走り回り始める。今の今までは、どんなに混乱していても“ティファヌがいるから大丈夫”と最後の防衛線を張れた。しかしその前提条件が崩れたら？ 昨日、力を使い果たしたといっていた。もう消えてしまっていたら？

「置き土産が……これかよ。シャレになんねーぞ」

それに何より。もっと大切なことがあった。

「まだ……助けてもらったお礼も言っていない。恩返しもしていない。あの娘を邪書に堕として、何も言わないで……。最悪だな、俺は」

慙愧に耐えない。せめて、せめてもう一度会えたら、ティファヌの望むことを何だってやってあげるのに……！

——そうか！ それは好いことを聞いたぞ。うむ、ならば汝に手伝ってもらおうとしようか。

俺は——絶句。

「あ……あ……？」

なんて言った？ ティファヌが、いる？

「え……あ……お前……」

俺は呆然としたまま、鏡の中の俺を見つめ続ける。

何のリアクションも示さなかったからだろうか。不機嫌そうな少女の声が、空間に響いた。

——むう！ 汝は既に妾の所有者^{オーナー}ぞ。腑抜けておってどうする！
まあ、ともかくとして。今、何でもすると言いよったな？

彼女がいてくれた。その喜びなどまるで塗りつぶすかのように、彼女の口から俺にとっての処刑宣言が下された。

——うむ！ それでは手伝ってもらいたいのだ。ううむ、そのためには現状の説明をせねばならんかの。

「あ、ああ……。それは助かる」

少し落ち着いてきたので、ちょうどどうして俺が女の子^{……}になったのか！ を聞きたいと思っていたところだ。

「どうすんだよ……。こんなじゃ学校にも行けねえじゃねえか……」

すると、ティファヌが不思議そうな顔をした。

——ほう？ 汝は学校に行きたいとな？ 眠っている間に汝の知識系の記憶を覗かせてもらったが、うむ、それならば問題あるまい。

妾は書ぞ。その下位の紙切れに細工するなど造作もないこと。今晚ほどには通知が来よう。

それを聞いて安心した。大学には友達が殆どいないので、容姿云々で騒がれることはないだろう。

それで、本題だ……。

「それだけじゃないだろ？ ほら、言いたい事はちゃっちゃと言いな」

——そう急かさんでよい。簡単なことぞ。妾の今までやってきた仕事をやってほしいというだけの話よ。妾は今、力が完全に枯渇して存在を保つのも危うい。そこで汝の体を借りて休眠している状態よ。殆ど表層に出ることはできぬし、汝のエピソード記憶を覗くこともできん。プライベートに関しては安心されよ。

まあ、納得。しかし、あんな戦いを続けなければならないのだろうか。そう考えただけで、体に震えが走った。その震えは、確実に俺の体を厚くさせた。つまり——

闘争本能、だ。

「……やってやる。やってやろうじゃねえか。襲ってくるってんならぶち殺してやる。武器はあるんだろ？」

俺の変わり様に少し驚いたかのように、ティファアン又は戸惑いながら首を縦に振った。

——武器を出すのならば、簡単よ。時禱書の参考にしたいページを

思い浮かべ、その月の名前を呼べばよい例えば……『三月』。

彼女がそう言った途端に、……何もおきなかった。どうやら時禱書本体へのアクセス権は俺が掌握してしまっているらしい。ティファンはそのことにはこう答えた。

——おそらく汝と妾の親和性が非常に高かったのだろう。事実今はなんともないが、汝の体に入ったときは全て侵食されてしまうかと思っただけ。

そこで俺はまず、時禱書を本として顕現させる訓練をすることになった。初めはアンチヨコとして使ってもいいらしい。ただ、手馴れた相手がいた場合、一瞬で兵装転換できないのは致命的との事。とにかく俺はやってみることにした。

——言い忘れておったが戦闘状態……つまりクルマで言うところのアイドルリング状態にするには、昨日のキーワードを唱えよ。

昨日の……昨日のキーワードって、あれか？

「たしか、『いざ、我が理よ』とかいうのか？」

ティファンはにつこり笑って（そんな気がした）——それよ！と言ったのだが……。だが……。

「残念。覚えてねえ」

彼女のムキーツという声が聞こえた様な気がした。

——この阿呆が！ 覚えんでどうする！ ……まあよい、先に顕現

ぞ。それならば“時禱書となる”事なしに具現化できるからの。

俺はそれを聞くと、速練習を始めた。

顕現とはいえ、もともとは俺の中に埋まったままなんだろう？ それをまず確かめなきゃ……。

目を閉じて自分の中を意識する。昔見つけた本の中に、似たようなのがあった気がしたので、それをまねてみる。

『カバラ十字の被い』という。単純にそれ自体は、魔術師がトランス状態に入るために余計な雑念を排除するとして行うものだ。雑念が一片も残さず無くなるまで、何度でも、何十回でもそれを繰り返し返すらしい。

俺はまず、背後に後光が差すのをイメージする……。否。差しているのだ、後光は。俺が実際に知覚していないだけで、後光はすでに輝いているのだ。それを強く強く確認することにより、現実のものとする。

右手をまっすぐに前に突き出す。この手は、即ち剣なり。俺は右手に徐々に剣の重みを感じていく。そしてそれを、掌握。剣印を結び、己が手を剣とする。それを剣の重みに負けぬようゆつくりと振り上げて後光に浸す。勿論、実際には剣などない。しかし、「これは剣である」とし、それを知覚・観測してしまえば最早俺の右手は剣なのだ。

ゆつくりとその剣先を額に持ってくる。あまり早く動かしては後光から持ってきた光が消えてしまう。だからといって、あまりゆつくりとしすぎてもよくない。

そして、唱える。

「アデー汝らが」

俺の剣は額に触れ、光球を成す。

「マルクト王国に」

次に水月（鳩尾）に触れ、額と腹部に光線を引く。

「ヴェ・ゲブラー峻厳と」

一旦線を切り、右肩にみたひ三度光球を形作る。

「ヴェ・ゲドウラー莊嚴と」

そこから線を絶やさぬよう、慎重に左肩に触れた。

「ル・オーラーム永遠を」

そこで初めて剣印を解き、両手を組んで祈りを捧げる形を取る。

「エイメンアーメン」

俺は全身にひかりが満ち渡っていくのを感じながら、探した。今の俺の中に、異物はたった1つ、時祷書だけだ。真っ白な気持ちで光の中それに触れた。

目を開けると、俺の小さくて真っ白な手が、古びた本を握ってい

た。俺は思わず、口を開いた。

「これ、が……。時祷書……」

呆然としていた俺だったが、驚きの声を上げたのはティファヌだった。

——今は『カバラ十字の抜い』！？ 汝はどこでそのようなものを……。汝の記憶を見た限り、それを知っているものなど殆どおらぬはずぞ！

驚き慌てるティファヌに、答え合わせをしてやった。懐かしい話しだなあ。

「昔な、家の蔵を探検していたときだよ。なんだか怪しげな本を見つけてさ、それを読んでいるうちにどんどん嵌っちゃって、いつの間にか日常的に、ね。試験前とか試合前とか、集中力が必要なときは特に念入りにやってたんだ。そうするとき、余計な全部が消えて不思議といい結果が出るんだよな」

そう言って目を細めた。時祷書も出たことだし、武器の練習か。そうしたら中庭がいいんじゃないだろうか。あんな鎌みたいなかいかいものが出てきても、居間とかじゃテレビ壊して怒られそうで心配だ。

そう思っただけで中庭に向かったのだが、ティファヌから異常と言っただけでいかに心配されてしまった。

——そ、その本の名は！？ 下手な本ではあるまいな！？ いや、そのほかにもその分だと読み漁っていきそうに怖いが……。その、セラ

エノ断章とか、無銘祭祀書とか、妖蛆の秘密とか、あとは……黄衣の王とか？

聞いてみても何のことだか分からなかった。しかし心配するくらいだから読んだらヤバイのだろうか。ちよつと心配になったので、答えと共にそれを口に出した。

「ああ、俺が読んだのは『魔術・理論編』ってやつだよ。市販の。で、そのなんだ？ そいつらは読んだらめっちゃグロくて気持ち悪くなるのか？」

俺は極めて軽く返したつもりだった。しかし、ティファンヌにとつては重大なことだったらしい。彼女はものすごい剣幕で怒鳴り返した。

——馬鹿者！ いいか、そやつらは妾たち時禱書の手になど負えぬ。邪書なぞではない。禁書よ！ 1度読めばどんな人間も狂い死ぬ。最悪の……この世にあつてはならぬもの……。まあ、汝が出会う可能性など万に1つもないのだがな。知っている、ということは強力な武器になるということだ。

「そつか……」とだけ返し、俺は中庭に降りた。

——さて、ではまず3月のページを開くがよい。誰が何を持っている？

えーと、3月……。これか。わけの分からない文字でいろいろ書いてあるが、注目するべきは1番下の図だろう。これは……。

「男が、枝を鎌で刈っている？」

——そう。その通りよ。しかしな、この絵の意味は『葡萄刈り』ぞ意味が分からない。何度見ても、男が植物を刈っているようにしか見えない。これを、ぶどう狩りと？

——そう。葡萄とは子宝とも取れる。まあ、解釈は人それぞれ自由ではあるがの……。それが導き出すは……。子供殺しぞ

絶句した。……。信じられない。子供を、この道具で殺す？ それによって、その怨念によって力を得るのか？

——体裁さえ整っていればなんでもよい。とにかく、まず呼び出すものの名と月の名を唱えよ。その後その絵にある鎌を強くイメージせよ。先程汝が成した『カバラ十字の袂い』と同じ要領ぞ。アレだけ見事にできるのだ、問題はなかるうて。

子供を……。いや、とにかく、今は武器を手に入れなきゃいけない……。子供云々は全て忘れて、俺は目を閉じてその鎌を意識した。そして、唱えた。

「『3月の、草刈鎌』」

右手を軽く握る。その中に柄があつて、湾曲した刃があつて……。

重みを、感じた。

驚きに目を見開くと、そこには今使用されたばかりのような質感のある、草刈鎌があつた。何度ひねっても確かにある。素振りをするが、消えてなくなる様子はない。成功……。なのか。

「で、どうやって元に戻すんだ？ コレ」

出しっぱなしだと警察にタイーホされること間違いがない。

——うむ、その方法だが……『なかった』と認識すればよい。先程の逆ぞ。

「逆って……」

俺は深く溜息を付いた。

「普通に出すより大変じゃねえか」

——では先に『本を開く』ぞ。

本を開く？ 本ならもうこうして既に開いているけれども。

「先のブースト状態のことを、俗に『本を開いた』といつての。汝はもう既にヒトではなく書であるからな、容易いはずぞ。さて、早々に詩を詠うがよい」

ヒトじゃなくて本って……サラリと流されたが相当重要なことじゃないだろうか。これも諦めて受け入れるしかないのだろうか……。

「俺はもう既に本だって言っただけど、直んねえのか？」

幼女は自信満々に答えた。

——直るっ！ ただし、妾に力が戻ればの話だがの……そのために

も、一刻も早く全ての武器と能力を手にしてほしいのだ。さて、と
そろそろ妾は眠る。次に起きるのは3日後故、しっかり使い方をマ
スターしておくのだ。よいな？

「よいな？ って、待て、詩がわかんねえ！ …………… 寝やがった
か、畜生」

俺はその場に崩れ落ちながら、一生懸命脳みそを漁って詩を思い
出そうとした。

高志……助ける。

で、結局どうして俺は女の子なんだ……？

Le quatrimelivre (後書き)

とりあえずTSはしたものの……。活かし切れていないです……。てかこのところずっと説明回なんで、次回辺りから日常アゲイン！ってことになりそうです。

うあー、日常シーン書くの苦手だー。

あ、感想やご意見等お待ちしております。どんなものでも結構励みになるもんなですよ、アレ。

……ウソです。すっげー嬉しいです。評価入ったり感想くださったりするとゴロゴロと転がって喜びを表現します。

L e c i n q u i ? m e l i v r e (前書き)

暑さのせいでだいた文章がグダッています。

結構重要な回なのにな……。コンスタントに面白く書ける作家さんがうらやましいです。

文章量はいつもの通り。

Le c i n q u i ? m e l i v r e

「あー、『いざ、我が理よ、何とか告げよ 罪深き己の祝ぎ詩を』」

……何もおこらねえ。勉強不足といわれればそれまでだが、そんなもの、覚えていた方がどうかしている。あんな状況で1回しか言わないなんて、人のことを馬鹿にしているとしか思えない。というより、裏庭で1人でこんなの練習しているなんて知れたら、恥ずかしくて生きていけないんじゃないだろうか。

いや、幼女だ。今の俺は幼女だ。だったら許される。こんな恥ずかしい格好で——某エロ本特典の女兒パンツに特大ワイシャツ——、こんな恥ずかしいことを——リリカルツ！ リーブル！ マジカルチエーンジツ！——……。

「やって、られるかあああああああ！」

俺はついにブチ切れると縁側に座り、タバコをふかしはじめた。

さすがに朝の1発目はよく効くなあ。といっても今は昼の2時。タバコを吸っていたらお腹が大きく鳴った。

何か作るか……と居間に向かったところで、玄関のチャイムが聞こえた。俺は待たせてはいけないと、小走りに玄関に駆け寄って扉を開けた。

そこにいたのは――

「《高志！ 無事だったのか……。傷の具合はどうなんだ？》」

一晩ぶりとはいえ、妙に懐かしさを感じる親友の姿がだった。

「《さ、ここでポーッと突っ立ってんなよ、とりあえず中入ろうぜ？ 色々聞かせてくれよ》」

しかし、高志は微動だにしなかった。そのまま呆然と俺を見つめる。無言のまま時が流れる……。先に動いたのは高志だった。

バツとその場に片膝を着き、俺の手をとりまっすぐに射抜くかのような目で俺のことを見た。

そして、彼は剣を抜き放った。すなわち……。

「好きですッ！ 結婚してください！ 言葉の壁なんてぶち壊して見せますから！」

俺はフリーズして、きつちり3秒後に再起動した。

たしかに、失念していた。今の俺の姿による破壊力をつ！ 慌てて左手で裾を、右手で胸元を隠すが、真っ赤な顔も相俟って余計扇情的なポーズになってしまった。

「《わ、み、見るなあ！》」

「何言ってるか分かりません！ でもきつと『見ないで……』的な

ことを言っているのは想像に難くないッ！　だが、だがッ……それがイイ」

とりあえず、問答無用で1発殴っておいた。

落ち着いてみるが、先程からの反応からするとどうも俺は今日日本語を喋っていないらしい。

高志はどうしたものかと日本語で問いかけてくる。

「あー、大丈夫ですか？」

もしかしたら……と考えた俺は、高志の言葉を直接真似してみた。音ならばどうにかなるか。

「アノ、ダイジョブ、デスカ？」

その瞬間、頭の中で何かの回路が繋がった気がした。意味は分かる。そしてそれを表に出す方法も、今直感で分かった。ならばもう日本語は完璧なはず。

高志はアタフタしていた。

「えーと、あー、アークスピーキングリッシュ？」

俺はおふざけ半分でそれに返してやる。

「ニホンゴ、少し、できます。私、ティファンヌです」

高志は顔を真っ赤にしながら必死に言葉を選んでいる。その姿が

面白くて面白くて、しばらく飽きるまでこのままいてやろうかとほくそ笑んでいると……。

「ぼ、僕は桜木 高志っていいます！ えっと、あの、その！」

ぼ、僕って何だ……そんなキャラじゃないだろう？ 慌てすぎだ馬鹿！

その場で膝を叩いて笑い出したいのを必死で堪え、高志の言葉を待った。しかし、早いところネタばらしをすればよかったとすぐに後悔した。

「あの！ 結婚してくださいっっっ！」

開いた口がふさがらないとはこのことだろう。しばらく俺は呆然としてしまった。しかし我に返ると、慌てて正体を明かそうとしたが……どうにも手遅れの感が否めない。

「お、俺ダよ！ 笹路！ 昨日蔵でいろいろアったデしよう？ そのセイで幼女にナツちゃったけど、俺だよ！」

しかし、興奮に興奮を倍掛けしたような高志がそれで止まろう筈もない。その上。

どうして普通に日本語が発音できないんだ！？ ちゃんと音まで理解したはずなのに！

俺は先程確実に日本語を理解したと感じた。しかし上手く喋る事ができないのだ。だが、多少考えればその答えは自ずと出てくる。

おそらく、体の構造ゆえだろう。発音の仕組みがそもそも違う言語同士では、声帯や喉内の使い方が確実に変わってくる。それが影響していくら脳内で理解しようとも発音には反映されないのだろう。おそらくコレは慣れの問題だろうから、しゃべり続けるうちにどうにかなるだろう。

さて、それよりも、だ。

問題は、どうやって俺自身だと高志に理解させるか、だ。

「君が……笹落？ え？ 今ティファン又って言ったよね？」

俺は必死に昨日のことを説明した。襲われたこと。本がいきなり力を持ったこと……。幼女のこととは伏せて、どうにか分かって貰えないかと説明した。

「そうか、お前は笹落だけど、今は幼女なんだな。結構結構……結婚してくれ」

「《お前の頭の中は、年中春か！？》」

思わず外国語で怒鳴ってしまったが、いったいコレは何語だろうか。とりあえず茶の1つでも出してやろうかと居間に向かった。

「ほら、入りなよ。お茶グらい出しテやるから」

お茶と茶菓子を運ぶが、この体だとうにも危なっかしい。ヨタヨタと運ぶ姿に釣られたのか、高志が寄ってきた。

「だ、大丈夫かな？ カエデちゃん。お兄ちゃんが手伝ってあげるか

らね」

テーブルにお茶を置くと、問答無用でまわし蹴りをお見舞いした。

抵抗すれども体格差で押さえつけられる。そんな不条理を俺は今実感していた。

即ち――膝抱っこ。

「ナゼ……」

「かわいいは、正義っ！」

郵便物が届いた音に、俺は無理やり高志を振りほどいて郵便受けに向かう。多分大学の改変書類だろう。俺は封筒を破りながら居間に戻った。そして、テーブルの上に中の書類をぶちまけてみる。そこには、こう書いてあった。

『揺籃小学校6年 桜木・ティファヌ・楓』

俺は震える手を必死に押さえながら、2枚目に目を通した。

『せっかくティファアンヌという佳き名をつけてくれたからの、汝も名乗るがよい。名誉なことぞ。あと、家族は当分帰って来ないのである？ その桜木とかいうのの妹にしておいたからの、感謝するがよい。あと汝は今フランス語しか喋れぬはずぞ。日本語は真似しておれば自然上達するのでな。以上よ』

……そうか、フランス語か。というか、高志の妹って何だ。冗談じゃない。

「俺の……妹？」

「見ルなっ！」

叫んで覆い隠したが、既に後の祭りだった。手紙は高志の目に入ってしまっただろう。高志が叫んだ。

「妹とかあああああああ！！！！」

俺は溜息を付いた。

「俺……大学落トす気は無イぞ」

「大丈夫だ。全部レポートだろ？ プリントは全部取ってきてやる。お前は安心して小学校に通え。さて、今から挨拶に行くぞ」

俺は必死に抵抗するが、悲しいかな、体格差では圧倒的に敵わないことが既に証明されている。同封されてきた簡素な洋服を無理やり着せられ、小学校へ引っ張られていった。

公立揺籃小学校。俺が約10年前に卒業した小学校だ。まさかまたここに通うことになるとは思わなかったな……。いや、一度卒業した小学校に通うやつなんて、俺が人類史上初めてじゃないかと思う。

半分魂が抜けたような呆然とした表情で職員室から校長室に通された。そこにはかなり太った脂ぎったオヤジが。

「《キモ……》」

まさか日本語で言うわけにはいかない。『兄』の高志が挨拶していた。

「不出来な妹ですが、これからよろしくお願いします」

「いえいえ、かわいらしくて聡明そうなお嬢さんじゃあないですか。桜木さん、これからよろしくお願いしますよ」

「《よろしくしたくねーよ、ハゲ》」

そういつたら、「日本語で喋れ」と軽く高志に殴られた。日本語で言えるか、あんなこと。

高志はヘコヘコとフォローしている。

「いや、すみません……。こいつ日本語が苦手です……」

「ああ、義理の妹さんでしたかな？ いやいや、徐々に慣れていけばいいことでしょう。では、早速教室の方にご案内しましょう」

あまりの話の早さについていけない俺だった。

担任は体格のよい体育教師だった。

「ここが明日から桜木が通うことになる教室だ。今日はもう誰もいないが、机を運んでおこう」

俺は高志と別れ、担任の十塚とみづかに付いて空き教室に来ていた。いくつか机と椅子を試し、比較的小さなものを選んで教室に戻った。

必要な分の教科書を机に入れていると、十塚が俺の両肩に手を置いて話し始めた。

「日本語は大丈夫か？ 何かあったら俺のところにすぐ来いよ……」

正直なところ、気持ち悪い。妙にべたべたと体を触ってくるのだ。頭をなでたり、肩を軽く叩いたり、腕を触ったり……。これは明白に訴えてもいいのではないだろうか。気持ち悪いこと果てしない。だが初日から事を荒立てたくない俺はまだ我慢する。たまにやんわりと払いのけるのだが、しつこく触り続ける。そしていい加減ぶん殴ってやろうかと思いついたときだった。

丁度よく高志が呼びに来たようだった。

「楓。まだ掛かるのか？」

その声を聞くと、十塚はチツと舌打ちして手を放した。俺はコレ幸いと高志に抱きつき、相変わらず慣れない日本語で帰ろうとせかした。

「お兄ちゃん、帰ろ？」

小学校はヤバイ。マジで小学校は危険地帯だと認識した俺だった。

お兄ちゃんと呼ばれた高志は鼻を押さえ、ポタポタと地面に赤い花を咲かしていた。

そしてその帰り道、俺の住む場所の話になった。俺はとりあえずは自宅で過ごしたいと言って、自宅に誘う高志を跳ね除けた。あんな野獣の住処なんか行ったら、一晩で散らされてしまふに決まっている。何がと言わないが、ナニでだろう。

俺は自宅に帰ると、また変身の呪文(?)を練習し始めた。

「『いざ、我が理よ え〜っと……』。ダメだ、わからねえ」

仕方ないのでタバコを吸う。銘柄はBLACK DEVIL。結構きついタールとニコチンが脳に直撃する。

「あー、効くうー」

だらーっと体を投げ出して意識を何処かに飛ばす。

幼女がタバコとか、シユールな光景だな……。いや、外ではもう吸えないし、そもそも買えないじゃないか……。

吸い終わった俺は飲み物を飲むために居間に上がる。そのついでに手紙を整理していると、なんと言うことが。書いてあった。

『そうそう、本を開くときの詩は、『いざ、我が理^{うた}よ 告^{ゆめゆめ}げ知らせよ、罪深き乙女の、祝^{ゆめゆめ}ぎ詩を』であるからの。努^{ゆめゆめ}々忘れぬよう』

俺の努力を返せ！

Le c i n q u i ? m e l i v r e (後書き)

いかがでしたでしょうか。

「よかったよ!」の一言だけでもいただけると、報われたなあ……
という気持ちになります。えさを与えてはいけません、なんてことはありません。

どんどんえさ下さい。その度にどんどんエグい話になっていきます。
ええ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0165u/>

ある少女の質素にして偉大なる時祷書

2011年10月8日17時54分発行